



AUE Monthly



2010年 5月 6日

第 22 号

編集・発行

愛知教育大学広報部会

TEL 0566-26-2738

FAX 0566-26-2500

目次

- 行事予定(5月)
- トピックス
 - ・教育研究基金寄附者銘板を除幕
 - ・新設備, 改修施設見学会
 - ・新規採用職員研修
 - ・刈谷市総合文化センターが開館, 本学も参加
 - ・2010 年度入学式
 - ・2010 年度大学院入学式
 - ・高額寄付者に感謝状
 - ・学長があまロータリークラブで講演
- ・学長が近隣市長と懇談
- ・図書館の空間「アイ♥スペース」と命名
- ・新入生歓迎 春のランチコンサート
- ・富士山展
- ・中川文科副大臣との懇談会
愛教人インタビュー
- ・日本陶磁協会賞受賞の中島晴美教授
- ・本学をスケッチする村瀬康司さん
お知らせ・報告・投稿
- ・陸上競技部がマガジンで上位浮上
- ・井戸准教授からのフィンランド便り

行事予定(5月)

- 6日(木) 教務企画委員会(16:40~ 第二会議室)
- 学生支援委員会(16:40~ 第五会議室)
- 10日(火) 役員会(10:00~ 学長室)
- 12日(水) 経営協議会(10:00~ ホテル名古屋ガーデンパレス)
- 代議員会(13:30~ 第五会議室)
- 教育研究評議会(代議員会終了後~ 第五会議室)
- 18日(火) 役員部局長会議(13:30~ 学長室)
- 教育研究評議会(代議員会終了後~ 第五会議室)
- 19日(水) 教員人事委員会(13:30~ 第五会議室)
- 財務委員会(15:30~ 第五会議室)
- 大学改革推進委員会(16:40~ 第三会議室)
- 25日(火) 役員会(13:30~ 学長室)

トピックス

教育研究基金寄附者の銘板を除幕(4/1)

本学の教育研究基金寄附者の銘板除幕式が4月1日(木), 講堂の玄関ロビーで行われた。式には松田正久学長はじめ理事や松井信行氏, 澤崎忠昭氏の両新監事, 職員らが出席し, 松田正久学長, 折出健二理事が銘板の左右のひもを引いて除幕した。

基金は2005年10月に設立し, 寄附総額は2010年2月現在で3800万円余。これまでに交流協定校



からの学生受け入れ，留学希望者への留学支援，表彰対象学生への報奨などに使われてきた。金属製の銘板には高額寄付者のうち個人 46 人と 11 企業団体の名前が刻印され，今後も寄附者の了承を得て氏名，企業名を刻印していく。

学長は銘板の氏名などを確認しながら，さらなる寄附額増に期待していた。

新設備，改修施設見学会（4/1）



本学に導入された新たな備品や新設，改修施設を公開する見学会が4月1日（木）午後，学内で行われ，松田正久学長ら役員や報道関係者，教職員らが担当の教職員の説明を受けながら熱心に見て回った。

自然科学棟に設置された分析電子顕微鏡の視察からスタート。松田学長，澤武文科学・ものづくり教育推進センター長があいさつ。機能などの説明があり，

従来機種に比べて試料の移動がしやすくなり，CCDカメラ搭載でデータの収集が容易になるなど操作性，安定性がよくなったという。この後，顕微鏡室に入り，パソコン画面で金属片，毛髪，植物の組織などを確認した。

続く附属図書館の太陽光発電システムでは屋上でパネルを視察。改修された陸上競技場や学生寮管理棟，プールや建て替えられた音楽練習棟を見学。

ピアノの練習室は小さいながらもエアコン，防音設備が完備，思い切り演奏の練習ができそう。また，冷暖房効率を高めるための第一，第二共通棟のガラス入れ替えなどを確認した。



新規採用職員研修（4/2）



2010年度の本学新採用職員研修会が4月2日（金），第五会議室で開催された。対象者は昨年4月2日以降に採用された教職員23人。

松田正久学長があいさつし，自己紹介の後，本学の学部や国立大学法人化後の現状を説明，「愛知教育大学が目指すもの」について講演した。続いて折出健二理事が大学運営について説明し，休憩を挟んでカリキュラムと授業運営，社会連携と本学の役割，学生支援，附属学校（園），事務組織・就業規則について

担当理事らがわかりやすく説明。新職員らはメモをとるなどして熱心に聞き入っていた。

刈谷市総合文化センターが開館，本学も参加（4/3，4/4）

本学が包括協定を結んだ刈谷市の総合文化センターが完成，4月3日（土）に竹中良則市長，松田正久学長はじめ来賓，市民ら約1500人が出席して開館記念式典が行われた。

書家の記念揮毫などの後、竹中市長が「市制施行60周年の節目の年を迎え、新たなスタートと位置づけている中での開館に感謝したい。文化芸術の事業を見ていただくとともに、生涯学習では愛知教育大学などの協力で市民講座の内容も充実させた。この施設が市民に利用されるようご支援をお願いします」とあいさつ。秋川雅史のミニコンサートなども行われ、オープンを祝った。

また、4日（日）にはオープン記念のイベントとして、本学理科教育の教員、学生による「おもしろ科学実験」「たのしいものづくり教室」が同センターで開催された。桜も満開の時期で久しぶりの快晴。関係者によると、子どもの参加者が少なかったが、学生たちは、余裕をもって児童と接し、保護者との対応もそれなりにこなし、しっかりとものづくりの指導をしていた。準備した教材に余裕があり、保護者の方にもものづくりを体験していただき、参加者は親子でものづくりを楽しんでいたという。



2010 年度入学式(4/5)



本学の平成 22（2010）年度入学式が 4 月 5 日（月）午前 10 時半から、講堂で 挙行された。松田正久学長が登壇し、初等教育教員養成課程 425 人はじめ大学院 142 人の計 1128 人に対して入学許可を 宣言。中等教育教員養成課程社会専攻の 新家玄樹さんが「学則並びに諸規定を守 り、本学学生としての本分を全うするこ とを誓います」と入学者宣誓を行った。

学長は式辞の中で新入生、保護者に向 けて入学を祝うとともに今年創立 61 年 目となる本学の歴史を紹介。その上で三 つの期待として「まず、なぜ、どうして? と自らに問うことが教養で、本学の学びの中で身に付 けてほしい。二つ目は教育のあり方について学生諸君と教員の意見交換をしたい。アカデミック な学びの場を創る活動に参加してほしい。最後に自分の立ち位置を簡単に決めず、物事にチャレ ンジし、クラブ、ボランティア活動などを通して自分づくりを進めてください」と激励した。

続いて役員部局長が紹介され、管弦楽団の演奏、混声合唱団による合唱が行われ、講堂は立ち 見を含めて満員の学生、保護者で溢れ、演奏などに大きな拍手が送られた。

2010 年度大学院入学式(4/5)

平成 22（2010）年度の大学院入学式が 4 月 5 日（月）午後 6 時半から第五会議室で行われた。

教育学研究科、教育実践研究科の新入生計 22 人の名前が呼び上げられ、松田正久学長が 入学許可宣言を行った。続いて教育実践研究科 教職実践専攻の西浦達郎さんが入学生を代表し て「学則並びに諸規定を守り、本学学生として の本分を全うすることを誓います」と宣誓した。

登壇した松田学長は「ここからお喜び申し 上げ、歓迎の意を表します。大学院修了者は教



員の世界では数が少なく、エリートで学門や教育課題に強い意欲を持った方々です。実際に教員をなさっている皆さんから現場で生じている教育問題を提起していただき、本学教員と一緒にあってその解決を探るのも大事な大学の機能だと思います」と激励。最後に本学役員部局長が紹介され、それぞれ新入生にお祝いの言葉を掛けた。

高額寄付者に感謝状(4/10)



本学OBが亡くなり、故人の遺志を継いだ愛知県内の知人男性が本学の教育研究基金に高額寄付を行い、松田正久学長は4月10日(土)、この男性に感謝状を贈り、故人の遺志を尊重して、寄付金は学生のために活かすことを約束した。

知人男性に遺志を託していた故人は稲沢市の木全満雄氏で寄付額は900万円。木全氏は1942年に本学を卒業し、長年教員を務めた。その後、木全氏は死去し、教員だった奥さんの實子さんも亡くなったという。木全氏と知人男

性の父親(故人)は本学で共に学んだ仲で、木全氏の遺産を受け取るようになった男性が木全氏の母校である本学のために役立てることを検討。男性が木全夫妻(写真はありし日のご夫妻)に代わって本学への寄付の手続きをしたという。

松田学長はこの日、学長室を訪問した男性に感謝状と記念品を贈り、善意に感謝するとともに木全氏の遺志を受けて寄付金を大切に使うことを約束。懇談の中で、男性は寄付金を「木全満雄・實子基金」として運用してもらいたいとの意向を伝え、学長は快諾した。

本学の教育研究基金は2005年10月に設立。木全氏の寄付金は団体、個人を含めて1回の寄付としてはこれまでの最高額。学長は「本学卒業生からの多額の善意に驚いた。木全さんご夫妻の基金は外国からの留学生支援に使わせていただきたい」と語った。

学長があまロータリークラブで講演(4/12)

松田正久学長は4月12日(月)、名古屋市中村区の名鉄グランドホテルで開催されたあま(海部)ロータリークラブ例会に講師として出席し、「これからの教育と愛知教育大学の役割」をテーマに講演した。

例会は第1895回という伝統を感じさせるもので、愛知県内の企業トップら同クラブ会員80人余が参加した。会長あいさつ、新規加入会員の紹介などに続いて、松田学長の紹介があり、講演に移った。

松田学長は高等教育と法人化前後の国立大学の状況、特徴と本学のモットー、運営の現況などを説明。一定規模の60国立大学法人中、1人当たりのCO₂排出量が最小となるなど「省エネ日本一」の大学となったことをアピールした。そして「日本は国の教育への投資が少ない。世界の中で日本の教育が存在感を高め、子どもたちをきちんと育てていくためにも、今、教育の舵取りをしっかりとしなければならない時に来ていると思います。本学は理科や数学の教育や外国人の子どもへの日本語教育などに取り組んでいます。今後、愛知県でも存在感ある大学にしていきたい」などと述べた。国立大学の運営の難しさなどを説明する学長の話を聞きながら聞く会員の姿も見られた。



学長が近隣市長と懇談(4/19～4/30)

松田正久学長は4月下旬、近隣4市役所を相次いで訪問し、各市長と懇談した。新年度のスタートを機に地域貢献を目指す本学の取り組みを紹介するとともに3月に本学が刈谷市と連携包括協定を結んだのを受けて、他市との連携を強化したい考えを伝えた。

19日(月)には豊明市役所に相羽英勝市長を訪ねた。定住外国人支援などについて語った後、松田学長が「豊明市内を走るバスを学生が利用できるようなればありがたい」と述べると、相羽市長は「愛教大がすぐ近くにあり、学生が市内に来てくれれば、街が活性化しそう。対応を考えたい」と前向きな姿勢を示した。

神谷学安城市長訪問は22日(木)に行われ、学長はサイクリングロードなど環境に配慮した同市の施策を評価し、包括協定も提案した。神谷市長は「協定が結んであれば市の課題に対して知恵を借りる際にもまず、愛教大にお願いすることになる。お互いに連携、協力できることはいろいろあるはずで、早急に検討したい」と協定締結に意欲を示した。

このほか、28日(水)、30日(金)にはそれぞれ林郁夫知立市長、鈴木公平豊田市長を各市役所に訪ねて連携強化、協定締結に向けて意見交換した。

学長の各市長訪問にはそれぞれ折出健二理事、岩崎公弥理事、村松常司理事と富岡逸郎事務局長が同行した。

なお、5月中旬にはみよし市役所に久野知英みよし市長を訪問する予定。

図書館の空間「アイ♥スペース」と命名(4/21)



本学附属図書館2階の多目的利用スペースの愛称が「アイ♥スペース」と決まり、4月21日(水)、命名式が行われた。公募で集まった作品の中から選考の結果、本学学生支援課の職員、福井千都さんが命名者に選ばれた。

この日、同スペースで式が行われ、折出健二理事(附属図書館館長)から福井さんに記念品が贈られた。アイ♥スペースの名称は愛教大の「愛」をカタカナで表現し「愛教大の構成員が愛情を込めて創った作品を発表する場であり、見る人も新

しい世界と出会い、触れ合い、「i」(自分自身)が成長できるなど様々な「アイ」を象徴する場の意味を込めたという。

同スペースではこれまで、作品展、写真展やランチコンサートなどが行われ、好評を博してきた。これからは「アイ♥スペース」が本学の新しい触れ合い空間として学生、教職員、市民らに愛され、親しまれ、これまで以上に活用されることが期待される。

新入生歓迎 春のランチコンサート(4/21)

「新入生歓迎 春のコンサート」が4月21日(水)昼、本学附属図書館のアイ♥スペースで開催された。ランチコンサートで音楽選修・専攻の3・4年生が日頃の練習の成果を披露。オーボエ独奏、ソプラノ独唱、ピアノ独奏など10人がシューマン、バッハなどの名曲を熱演、熱唱した。独奏、独唱などプログラムが次々と展開し、短い時間だったが、集まった約80人の聴衆は春の音色を堪能し、学生を讃えていた。



富士山展(4/22～5/18)

富士山のすべてがわかる「富士山展」が4月22日(木)、附属図書館2階のアイ♥スペースで



開幕した。本学の科学・ものづくり教育推進センター企画展で5月18日(火)まで開催。富士山の位置、形、生い立ち、活動史、文化などを貴重な火山弾、溶岩の展示を含めて多面的に紹介している。静岡大学60周年記念事業として同大と国立科学博物館の企画展で展示されたものに本学三宅明教授(理科教育)が作成した立体地図などを加えた「総合富士山展」となった。

主な展示品は横幅90センチ以上の富士山最大級の紡錘形火山弾、国の天然記念物に指定されて

いる高さ約50センチの溶岩樹型標本、上に乗って富士山を上空からバーチャルで俯瞰できる巨大赤色地図、希少なコケや火山学、形成史をパネル展示。学生らは火山弾を食い入るように見つめ、立体地図を備え付けのメガネでのぞき込むなど富士山の知られざる一面触れて、携帯電話で写真撮影するなどしていた。

一方、5月15日(土)午後1時～3時、自然科学棟5階地学系理科実験・実習室では本学の星博幸准教授、静岡大学の和田秀樹教授が講演。それぞれ「富士山の誕生と日本列島の歴史」「富士山の埋没ヒノの年代」のタイトルで話す。富士山展、講演とも無料。一般市民も自由に入場、聴講できる。

中川文科副大臣との懇談会(4/24)

「中川正春文部科学副大臣を迎えての懇談会」が4月24日(土)午後、名古屋市内のホテルで開催され、本学の松田正久学長はじめ名大総長、名工大学長や私立大学学長、役員、私立学校関係者ら約40人が出席した。

中川副大臣はアメリカの大学で学んだ体験を交えて自己紹介をした後、大学の経営環境の変化、国際化、学生に対する手立てについて、文科省がまとめた資料を基に講演。その中で副大臣は「大学が大衆化し、機能分化が始まった。学生の質保証が問われている。留学生30万人計画があるが、日本語に魅力があるなら大学が海外に拠点を設けるシステムも考えられる。日中韓での単位互換制度づくりも考えている」などと語り、教育予算拡充や学生のための給付型奨学金制度への転換にも意欲を示した。



質疑応答では、国立大学は評価の期間が短く、競争的評価で序列化され、大学の多様化に逆行しているとの指摘に、中川副大臣は「アメリカ型ではない、日本の基準づくりのために当事者である先生方の意見を聞きながら煮詰めていくことが必要だと思う」と応えた。

懇談会開催の呼び掛け人の谷岡郁子参議院議員はあいさつで「人材養成なくして成長戦略はありえない。皆さん(の関係予算)を切り込むのではなく、新しい政策、予算のために仕分けもやっており、政策には総合的合理性が求められている」と述べるとともに、講演後「マニフェストづくりのためにも現場の知恵をお借りしたい」と出席者に協力を求めた。

愛教人インタビュー

日本陶磁協会賞受賞の中島晴美教授

本学の中島晴美教授(美術教育)が2009年度の日本陶磁協会賞を受賞した。1年間の活動が最も優れた作家に贈られる賞で、推薦理由は「磁器作品としての独創性、技術レベルの高さ、完成度いずれの点を考慮しても受賞の資格が十分ある」というものだった。教授に喜びの声を聞き、



焼き物とは何か、造形教育のあり方などを語ってもらった。

受賞おめでとうございます。授賞式は7月とか。

「ありがとうございます。思いがけなく伝統と歴史ある日本陶磁協会賞をいただくことになり驚いています。授賞式は受賞者に課せられた東京・銀座での個展のオープニングパーティの中で行われます」

受賞理由をどう受け止めていますか。

「私は、陶芸の造形の特殊性と日本人の美意識をテーマに、制作とその造形論を研究しています。陶芸の造形には、西洋の近代美術概念だけでは計りきれない部分があります。それは、伝統に培われた日本人の美意識が色濃く反映されるということです。

素材と真正面に向き合いながら、自分を織り込んでいくという制作姿勢が、素材の魅力を最も引き出すとの造形論のもと、本来難しいと言われてきた、磁器の紐作りによる立体造形を制作してきました。それは、日本国内より海外からの反響が大きなものでした。そんな折に日本の大きな賞をいただいたのは驚きながらもうれしいことでした」

受賞の反響は。

「学生時代の懐かしい友人や、古くから支えてくれたコレクターの方々から手紙や電報をいただいて、今少しずつ返事を書いています」

本学での造形教育について考えを。

「大学で陶磁器の製造技術だけを学ぶのは、あまりにももったいないと思います。やきものを通して社会をみるというか、やきものを通して社会と繋がる。言い換えるならば、やきものを通して自分を知ることが出来ればより良いと思っています」

造形は“求道の実践”でもあるのですか。

「学者は、事実を積み重ねて真理に迫るとすれば、私達制作者は、虚構の中から真理を見出す様な気がします。私は、人間社会にはどちらも大切なことだと思えるのです。火星に行くことを求める科学と同じように、内なる自己を見つめる芸術は生きることに不可欠なことに思えるのです」

造形の難しさ、教授が目指す造形とは。

「土は制作の過程で、作者の本性を引き出す側面があります。それは、時には見たくもない自分をも引きずり出し、自己嫌悪に陥る危険もはらんでいます。しかし、そこからしか何も始まらないと思います。恐れず、真正面に土と向き合い、土の声を聞きながら、自分の理想を織り込み具現化することが、陶芸の造形の魅力を最大限に引き出す陶芸の造形論だと思っています」

本学の学生の特徴と学生へのメッセージを。

「まじめで、礼儀正しい学生が多いと思います。ただ、現実の社会はいろんな価値観の人々で構成されていますから、学生時代にいろいろ経験してタフになってください。そして、美術も数学や理科や国語と等価値で、人間には必要不可欠だと実感してほしいと思います」



本学をスケッチする村瀬康司さん

本学学内でいすに座って丹念にペンを走らせている男性を見かけた人はいませんか？ 西尾市に生まれ、安城市相生町で大工道具店を営んできた村瀬康司さん（73）で、松田正久学長が出会い、意気投合した町のスケッチ画家。2月から本学に足を運び、すでに数枚の学内スケッチを完成させ、本学に寄贈し、「学内は自然が豊か。1年間を通して描き続けたい」と意欲的。村瀬さんのスケッチ人生を聞いた。

スケッチを始めたきっかけは。



「中学生の時にペン画が人気になり、ガラスペンで風景や動物を描いていました。本格的に始めたのは 39 歳の時。友人に油絵をやっている刺激を受けて、当時住んでいた西尾市の日本画の先生について勉強を始めることにしました」

木の葉など緻密な絵ですね。

「先生が写真などではなく、とにかく現場で立体的なものを見て描けと言われ、忠実に実行してきました。デッサン力では安城になることを目標にやってきました」

難しさと魅力は。

「最初は苦痛でした。精密さが要求され、描くことに一生懸命でした。楽しくなったのは 15 年後、50 代の半ばでしょうか。スケッチブックの絵と現実の風景がきちっと同じように描けるようになり、スピードも速くなりました」

古い民家や消えゆく商店街など町の風景を描いた画は数百枚に上るとか。

「そう、900 枚くらいですね。12 年ほど前に息子が後を継いでくれ、仕事が楽になったので日曜日以外も外に出られるようになりました。西尾市の 40 店ほどの商店街を 1 軒ずつ描いていたら、道路拡幅ですべて壊されるとわかり、現に描き始めると同時に壊され始めました。以来、変わっていく町並みを描き残そうという目的に変わりました」

描く時間は。住民らの反応はどうか。

「週 3 日、1 日 3、4 時間で、1 枚と少し描ければいいところですね。はじめは崩れそうな古民家を描いたら、住人に叱られるかな、と思ったんです。でも、誰もが喜んでくれて、絵を上げると涙を流す人も。長年住み慣れた家への思いは強いですね」

本学はスケッチの素材としてはどうですか。

「学長さんに大学に来よう誘われて、正直、描いてもしょうがないと思いました。娘が卒業した大学をとにかく 1 度見ようと来て印象が変わりました。平坦な所に校舎とグラウンドがあるだけと思っていたら、自然が豊富で、山の中に起伏を生かした大学でした」

創作意欲には感心させられます。健康の秘訣、今後の目標を。

「安城駅前の 40 段の階段を 3 往復、散歩やランニングマシンで走ることも。時々、やり過ぎて、体調を崩すので注意しています。大学には四季があり、夏の炎天下は別にして 1 年間、通って目にとまった所を描きたいと思います。とにかく健康で 1 日でも長く描き続けたいですね」

お知らせ・投稿・報告

陸上競技部がマガジンで上位浮上

本学の活躍ぶりが陸上競技マガジン 3 月号に掲載された。本学陸上競技部部員の活躍は目覚ましいものがあるが、同号の「陸上競技力ランキング大学編」で本学は全国の国公立大学 213 大学中 32 位で国立大学では筑波大(1 位)、鹿屋体育大(26 位)に次いで 3 番目。東海地区では中京大(3 位)、中京女子大(24 位)に次ぐ 3 番目だった。

トピックスの記事では投てきの片嶋佑果さん(3 年)らが 60 位以内に入ったことが紹介され、「14 校がリレー 4 種目でランクイン」の見出しの下、本学については「着実に力を付けている愛教大が 3 種目で 10 位台、男子 400 ㍍R で 29 位と健闘した一方、意外にも、この 14 校の中に同じ東海地区の中京大の名がなかった」と書かれていた。

本学陸上部の筒井清次郎部長らは「継続的に活躍しており、これらの記事を見て本学を目指す学生もいます」としている。

井戸准教授からのフィンランド便り (投稿)

夜 9 時を過ぎても昼間のような毎日に、私の生活は完全に狂い始めました。一番の悩みは睡眠不足です。太陽が沈んでいる時間が短いために、自然と睡眠も短くなってきてしまいます。気温

はまだ一桁、雪が降ることもあります、すでに半袖の人もちらほら。時にバスにクーラーが掛かっていたりすると、フィンランド人は気が早いなあと思ってしまいます。夏が待ち遠しくて仕方がないという現れなのかも知れません。

本日5月1日はメーデーでしたが、フィンランドのメーデーは単なる労働者の日とは異なり、というよりむしろ殆どそれは関係なく、子供からお年寄りまでみんなで楽しく「春を迎える日」という方が正しい1日でした。フィンランド語で"Vappu"と呼ばれるメーデーですが、1週間程前から何人ものフィンランド人に「Vappuはどうするんだい？」と尋ねられ、私は当初何のことかさっぱり分かっていませんでした。



それがメーデーを指していることは直ぐに分かったものの、フィンランド人がそれをいかに楽しみにしているかということについては今日まで知る由もありませんでした。正確にはそれが始まったのは昨夜からでした。大学から帰宅しようとトラムに乗っていると途中で動かなくなり、見ると目の前は人、人、人。信号は全てストップし、警察官が出動しています。人々はお酒を片手にある人は座り込み、ある人は行列に参加しています。面白いことにその殆どの人が同じ白い帽子を被っています。聞けばこの帽子は高校の卒業式に被るものだそうですが、何故この帽子をメーデーに被るようになったのか、その真相はまだ良く分かりません。当日はこの帽子を街のシンボルとなっているような銅像などに競って被せるとのこと、また、帽子にお酒を入れて飲むという話も聞きました。よって年季の入った帽子は汚れていますが、汚れていればいる程格好いいのだそうです。

前日に始まったメーデーですが、当日は家族や友人とピクニックに行くのがフィンランドスタイル。うちの近くには海の目の前に大きな公園がありますが、そこはまさに絶好のピクニックスポット、ヘルシンキ中の人が集まって来たのではないかと思う程の人ばかりでした。当然この時も皆同じ白い帽子を被っていますので、ある種異様な雰囲気ですが、被っていない私はいかにも「よそ者」という感じがして何だか逆に恥ずかしくなってしまうまい。アパートから見える向かいの家に目をやると、家の中でもこの帽子を被っていたので、どうやら今日のフィンランド人は、この「勲章」を取ることはなさそうです。

(井戸 真伸)

編集後記

今号はゴールデンウィークを挟んだため6日発行となりました。本学構内の新緑は日一日とまばゆいほどの輝きを増し、軽装の学生は夏が待ちきれないようにも見えます。附属図書館・多目的空間の愛称が「アイ♥スペース」と決まり、今後は愛称で様々なイベントなどを紹介していきます。学生、教職員から愛され、活用されるスペースになってほしいと思います。愛教人インタビューは今回、2人に登場していただきました。中島教授の造形論は興味深く伺いました。村瀬さんによる本学スケッチはいつの日かアイ♥スペースで公開させていただこうと考えています。情報は発信するのも受け取るのも人。アイ♥スペース同様、Monthlyからも情報が多くの人の心に波紋のように広がっていけばうれしいのですが...。(N)

投稿のお願い

学内外の出来事(教育・研究・地域連携・国際交流・学内事業など)に関するニュースの提供をお待ちしております。

編集責任者:総務担当理事 折出 健二